

○JASS5改訂による、書籍の内容変更のお知らせ

2022年11月にJASS5が一部改訂となり、本書の内容に変更が生じました。下記より変更内容をご確認ください。

(2022年3月10日新訂第1版1刷用)

2級建築士受験スーパー記憶術 新訂版 JASS5改定による変更力所

	変更前	変更後
p88、下表内	シリカセメント	削除
p89、下から8行目	シリカ混合物	削除
p96、9行目の後ろ、解説と図を追加		<p>・結合材=セメント+混和材（高炉スラグ、フライアッシュなどの微粉末）、粉体=セメント+混和材+比活性無機質微粉末（石粉など）。今までの水セメント比をより正確するために、JASS5では従来の水セメント比を、水セメント比、水結合材比、水粉体比と3つに分けて呼ぶように改めた。石灰石や砕石などの石粉などは水和反応して固まらないため、結合材には含まれない。</p> <p>(図1追加)</p> <p>強度、中性化、水和熱などは水結合材比を使い、ワーカビリティ（施工しやすさ）、材料分離抵抗性（セメントペーストと骨材の分離しにくさ）は水粉体比を使う。結合材は骨材を結合する材で硬化後の性質に関係し、粉は粘性があり施工しやすさに影響する。ただし共仕、公仕などの他のマニュアルは水セメント比のまま。</p>
p96語呂下解説	・水セメント比とは、・・・	・水結合材比（水セメント比）とは、その順に水÷結合材（水÷セメント）で、水の質量÷結合材の質量（水の質量÷セメントの質量）。生コン1㎡中に水がWkg、結合材（セメント）がCkgだと、水結合材比（水セメント比）はW/C。この1㎡中の質量を、単位水量、単位結合材量（単位セメント量）という。
p96、下から5行目	水セメント比だけで決まる。	水結合材比（水セメント比）だけで決まる。
p97、1行目	水セメント比が大きいと、	水結合材比（水セメント比）が大きいと、
p97、イラスト内ふきだし2カ所	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p97、囲み枠下解説、3カ所	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p98、1～6行目、3カ所	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p100、1行目	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p101、下Q問題文と枠内の下線下	アルカリ骨材反応	アルカリシリカ反応（アルカリ骨材反応）
p102、3行目および下表囲み	アルカリシリカ反応、アルカリ骨材反応	アルカリシリカ反応（アルカリ骨材反応）
p102、11行目	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p103、下から4行目	水セメント比は小さく	水結合材比（水セメント比）は小さく
p103、下の表	およそ200年	およそ100年超
p104、語呂下quality（品質）の下に解説追加		・一般劣化環境の非腐食環境では耐久設計強度F _d は設定しなくてよい。
p106、10行目（4つめの黒丸）	各1個ずつ採取する。	各1個ずつ採取する（B法）。
p106、下Qの上に表を追加		図2追加
p107、Aのすぐ下の囲み	構造体コンクリートの圧縮強度推定試験	構造体コンクリートの圧縮強度推定試験（B法）
p112、Q内および下から6行目	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p112 Aの下の枠のあとに解説追加		・ワーカビリティ（施工性）や材料分離抵抗性に関する規定では、従来の水セメント比は厳密には水粉体比を使う。粉体には混和材の他に石粉なども含まれる。固まらない粉でも粘性に影響するため。
p113、上の枠下解説	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p113、下のQの文章	単位セメント量	単位粉体量（単位セメント量）
p113、下から6行目解説	・生コン1㎡中に何kgのセメントが入っているかが単位セメント量。水セメント比と単位水量から決まる。	・生コン1㎡中に何kgの粉体（セメントなど）が入っているかが単位粉体量（単位セメント量）。水粉体比（水セメント比）と単位水量から決まる。
p113、下から4行目解説	・水セメント比 = (単位水量kg/m ³) / (単位セメント量kg/m ³)	・水結合材比（水セメント比） = (単位水量kg/m ³) / (単位粉体量（単位セメント量）kg/m ³)

p113、下から3行目解説内（2カ所）	単位セメント量	単位粉体量（単位セメント量）
p116、下から2行目	水セメント比	水粉体比（水セメント比）
p117、イラストふきだし2カ所	水セメント比	水粉体比（水セメント比）
p118、上イラスト内	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p121、イラスト内（乾燥収縮ひび割れ）	水セメント比	水結合材比（水セメント比）
p121、イラスト内（自己収縮ひび割れ）	単位セメント量	単位結合材量（単位セメント量）
p121、イラスト内（自己収縮ひび割れ）	右記を追加	収縮低減剤、膨張材を使う
p121、イラスト内（温度ひび割れ）	単位セメント量	単位結合材量（単位セメント量）
p121、イラスト内（アルカリ骨材反応）	アルカリ骨材反応（アルカリシリカ反応）	アルカリシリカ反応（アルカリ骨材反応）
p122、上の枠下解説1行目	日平均気温の平均値	日平均気温の平滑値
p122、上の枠下解説3行目	平均値	平滑値（10年のデータを平滑化処理した値）
p151、下の図	図を入れ替え	図3追加
p157表内	屋内	非腐食環境（屋内など）
p157表内	屋外	腐食環境（屋外など）
p157表下	解説追加	上記の（非）腐食環境は両者とも一般劣化環境内
p157表下解説2行目	屋外 = 屋内 + 10mm	腐食環境 = 非腐食環境 + 10mm
p157表下解説4行目	屋内外	腐食環境か否か
p157表下解説に追加		・外壁、屋上スラブの屋内側も外皮に接するので腐食環境となる。また水漏れや結露が想定される部位（台所、風呂、トイレなどの床、壁、天井）は屋内でも腐食環境となる。一般劣化環境の他に、特殊劣化環境（海水の作用）と特殊劣化環境（激しい凍結融解作用）の2つが定められている。
p157、下から3行目	・屋外のかぶり厚さは、水がかかる分を見込んで屋内のかぶり厚さ + 10mm。	・腐食環境のかぶり厚さは、水がかかる分を見込んで非腐食環境のかぶり厚さ + 10mm。
p158、表の吹出し内	屋外 = 屋内 + 10mm	腐食環境 = 非腐食環境 + 10mm
p158、表内	屋内	非腐食環境（屋内など）
p158、表内	屋外	腐食環境（屋外など）
p159、下段の図中ふきだし	端部から1.5m以内	端部から0.5m以内
p159、図右下余白に追加で解説を入れる		スペーサー、サポートはJASS5では鋼製、コンクリート製、モルタル製。側面に限りプラスチック製でよいとされている。
p160、A（解答）、図中	1.3個/m ² 程度	0.9m角に1個（1.3個/m ² ）程度
p160、図中ふきだし	樹脂製のスペーサー	鋼製のスペーサー

(2023年6月)

図1

・ JASS5の改定(2022)により、従来セメントと呼んでいたものが厳密に分類された。

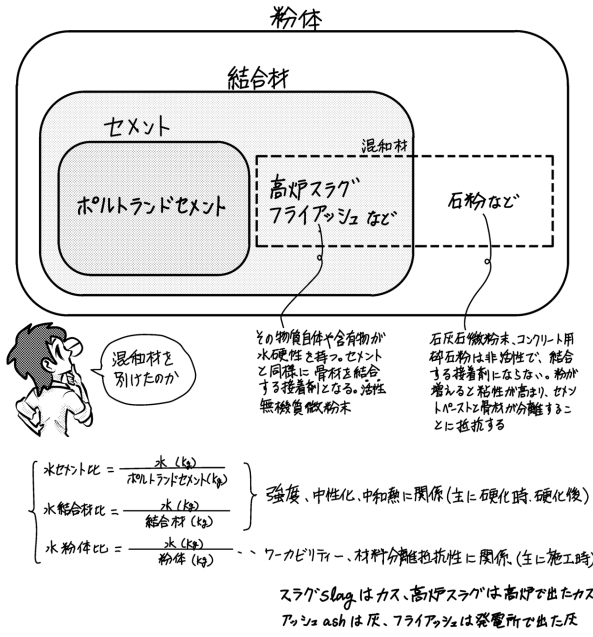


図2
コンクリート圧縮強度の検査3種

	受入れ検査	構造体検査A法	造体検査B
検査の意味	発注呼び強度Frを確保しているかを発注者(施工者側)が確認するため	構造体に打込まれた強度が品質基準強度Fqを確保していることを施工者が確認するため。(理想的な標準養生では強度は高く出た)	
1回の試験	打込み日、打込み工区ごと、かつ150㎡以下にほぼ均等に分割した単位ごとに1回		
試験の回数	3回	1回	1回
1回の試験での供試体の個数	3個 (3回×3個で合計9個)	3個	3個
供試体の取り方	適当なミキサー車1台から3個	適当なミキサー車1台から3個	均等に分けた3台のミキサー車から1個ずつ、計3個
養生	標準養生	標準養生	標準養生が原則
1回の結果X	3個の平均	3個の平均	3個の平均
判定基準	1回の結果X ≧ 0.85 × Fr かつ 3回のXの平均 ≧ Fr	X ≧ Fm	X ≧ Fm
記憶術	箱入り荷物の受取り 85%以上	3本の腸管	

Frは呼び強度で、調査管理強度Fmに等しい。受入れ検査のミキサー車1台から3個採取する方法は、JISの製品検査に合わせたもの。検査を合理化するため、受け入れ検査と構造体検査を併用できるように、A法が新たにつくられた。3台から1個ずつ取る方が安全側の採取となるが、受け入れ検査とA法はJISの規定に合わせているため、1台から3個とされている。高強度コンクリートの構造体検査は、打込み日ごと、打込み工区ごと、300㎡ごとに3回の試験で、1回につき1台から採取した3個で、計3回×3個=9個。【24N(標準)の倍強い!、150㎡の倍多い!】(下線の下に48N超、300㎡ごと)

図3

